

南鮮に於ける多槨式高塚古墳に就て

有 光 教

一

南鮮各地に多數分布してゐる長方形槨室を主體とせる高塚古墳は、既往の調査研究により、三國時代新羅及び加羅諸國の墳墓である事が明らかである。此は樂浪郡時代の漢式古墳を始め、高句麗式あるひは百濟式と呼ばれる横口式石室墳、さては時代の降つた一統時代新羅の横口式石室墳とは、主體の構造に本質的な差異がある。即ち彼は外來の一室多葬的家族墓であり、此は古來の一室一葬を原則とする個人墓である。而して墳墓は一封土に一槨室が通例であるのに南鮮地方の斯種高塚古墳には多槨的傾向が強く、一墳壙下に二箇以上の槨室を包藏する例が、自餘の地方乃至他形式の古墳墓^①に比し遙に多く、明らかに特徴の一に數へる事が出来る。本小篇起草の目的は筆者が朝鮮の高塚古墳研究の一助として、古新羅及び加羅諸國の古墳墓を調査中に、屢々逢着して特に注意を拂はざるを得なかつた是等多槨乃至多葬例を集録紹介するにあるが、なほ其の成因等に關する鄙見を開陳し、大方の叱正を仰ぎ度いと思ふ。

長方形柳室を主體とする構造上の根本的な部分に於て、三國時代新羅の高塚古墳と加羅諸國のそれとは全く一致するが、構成の用材其の他に小異がある。本論に入るに先立つて、夫々の構造を抽象的に記述して、理解を助ける事にする。

三國時代新羅の高塚古墳中、最も調査が行届き且代表的なものとして異論のないのは、新羅の古都慶州邑の南門外平地に分布する大古墳群であらう。本古墳群は踏東、路西、皇南、皇吾、仁旺の各里に互り、現認墳壠百五十基以上を數へ、底經約二百七十尺、高さ七十一尺の鳳凰臺と呼ぶ大圓墳を始め、高大な墳丘が聳立して並び、稀に見る壯觀の墳墓群であると共に、金冠塚、瑞鳳塚、金鈴塚等の華麗無比なる出土品を以て著聞である。其の主體部の構造は先づ地平面を深く掘窪めた豎壙内に木槨を組み、之を包むに人頭大野石の厚い堆積を以てし、石積の上表を粘土で目張りし、其の上に高く盛土をしたものである。遺骸を容れた槨はすべて長方形の輪郭を呈し、槨内の一半には仰臥伸展の遺骸の位置を、裝身具の遺存によつてあとづけ得べく、頭上の略々方形の空所には土器を主とした副葬品が充滿してゐる。これが最も普通に見る構造の概要である。

次に加羅諸國のものと推定される高塚古墳は、加羅諸國の故地にあるわけであるが、就中慶尙北道星州(伴跋)同高靈(大加耶)同大邱(峻)慶尙南道の咸安(安羅)、同昌寧(比斯伐)等に顯著な古墳群があり、學術的發掘調査を経たものが尠くない。それによると中核の石室は長方形の平面を呈し、羨道玄室の區別なく、周壁は野石を以て築き天井に扁平な巨石を列架したものである。これには明らかに上から葬り、あとで天井に蓋した豎壙式のものが多いが、又主軸

に向ふ一方の壁の石積が他の三方の如く垂直でなく、出入不揃でこの部分から横口式に葬つたと思はれるものも尠くない。然し單に構造形式の系列から云へば是等の長方形槨室は石器時代末期の磨製石劍、石鏃を副葬した彼の組合式石棺や、支石墓の石室につながりを持つもので、一室一葬の個人墓たることに變りがない。この故に彙に是等長方形槨室を以て古來の形式と言つたのである。

三

第一に主副二槨室より成る例を記す。即ち一封土内に二個の槨室を設け、一室に被葬者を收め、他の室に副葬品のみを容れたもので、主室に於ける遺物の排列は前述一般の場合に異なる所なく、二槨室と雖も一葬の墳墓である。

前出慶州邑南古墳群をはじめ、加羅疆域内の大邱府新池洞、大邱府外達西面、同解顔面、慶北星州郡星山洞の古墳群中に類例を見る。例へば星州郡星山洞大墳^②は調査者野守健氏によれば徑四十三尺餘高十八尺七寸の圓墳で長方形の石槨が略々平行して存し副室には三百個の土器がぎつしりと詰つてゐた。達西面第五十號墳^③は同様長方形の主副槨より成るも兩槨は丁字形の位置にあつた。又解顔面古墳群中には狭長な石室の中央に割石積の界壁を設けて前後に主室と副室とを分つた例が二つあつた。^④慶州邑南古墳群中には長方形の主槨の長軸の方向に別に方形(稀に長方形)の副槨を設けたものが最も多く、又主副共長方形で相並存するものもある。

第二に一墳壠二葬の例を記す。これには外形から云へば普通にある單室墳と、瓢形の双室墳とがあり、内部の槨室

の敷を言へば二槨室乃至四槨室より成る。茲では外形により先づ單峯の圓墳を、次に瓢形の双圓墳を記そう。尤も中には發掘調査によつて、はじめて原狀が瓢形であつたと推定出来る例がある。

達西面第三十七號墳、同第五十一號墳^①は、共に長方形堅穴式石槨二個宛を包藏し、前者が平行して並び、後者が丁字形に位置するの差こそあれ、何れも獨立して被葬者があり、二室二葬の典型的な例とする。後者に於て明らかなく、同時に二葬されたのではなく、既に一旦封土完了後、其の封土を掘つて次の被葬者を埋葬したもので、兩者の間に深縁な關係を考へるのは當然である。筆者が先年高靈池山洞第三十九號墳を調査した際、中央に大形の石室あり、同じ封土の一隅に小形の石室ありてこれにも遺骸と副葬品があつて完存し、前者におかれて後者が埋められた二室二葬の例である事を確めたが、類例は既往の調査の結果加羅鹽域内の各古墳群に互つて指摘出来たもの、如くである。^②

又昭和六年朝鮮古蹟研究會が調査した皇南里第八十二號墳は明瞭に圓墳であつたが、内に四槨二葬を容れてゐた。即ち主副兩槨より成る二組の墓が同一封土内の東西に造られ、東には東西に長く主槨と副槨とが連なり、西には共に長軸を南北にむけて別の主槨と副槨とが並んでゐた。而して東西墓の間には約六十纏の高低の差があつて、西墓が高位にあるが、それは元來の地盤を階段狀に掘つたのではなく、八十乃至九十纏の深さに地盤を掘窪めて造つた東西十四米六十南北約五米の矩形の堅坑内に營まれたもので、兩者の間仕切には粘土の壁があり、夫々の主副槨の區切は巾約九十纏の石積であつた。同一堅坑内に造られた兩墓の被葬者が親縁な關係にあるべきは言を須ひない。^③

次に瓢形墳であるが、これは既調査例が慶州邑附近に限られてゐる。先づ慶州邑南古墳群内の路西里瑞鳳塚は墳丘

の原状は不鮮明であつたが、發掘の結果、墳丘の兩端、南北に位して二つの積石があり、瓢形墳であつた事が判つた。即ち北方積石を中心に約六十尺の半徑の圓を描いて巾六尺内外に石積の刻が繞り、その一部を破壊して南方積石が築積されてゐる状態が明らかにされ、前者が先に築かれ、後者が其の麓に接してあとからつき足されたと云ふ築造順序を示した例である。南墳は民家の下に潜つてゐて調査が出来なかつたが、北墳から彼の金冠以下の華美な副葬品が續出し、其の寶冠によつて瑞鳳塚の名を獲た事は周知の如くである。^⑧

又朝鮮古墳研究會昭和十一年度古蹟調査報告所載慶州皇吾里古墳は地盤面下に二個の積石式榔室が、略々南北に並置せられ、東西を主軸として横はり、上に封土を築きたるものである。調査擔當者齋藤忠文學士は封土の断面により本來の封土が瓢形であつた事を推定してをられる。^⑨

又朝鮮古蹟研究會が昭和九年に發掘調査した皇吾里第十四號墳は、一封土内に四個の榔あり、互に平行して並び、夫々主榔と副葬品のみを容れた副榔とに分たる。即ち二葬であつて夫々外周を圍く護石がめぐり、其の圓周が中央で互に深く組合ひ、外郭を連れば瓢形となる。護石の交はる狀況から營造時間の前後が判り、發掘主査齋藤忠氏は副葬品により前に男性が葬られおくれ女性葬られた夫婦塚と見做してゐる。何れにせよ前に造られた護石を破壊してまで榔を近づけた構造上の密接な關係から兩被葬者が互に親縁の身分的關係にある事疑ない。發掘前の封土は、はつきりした瓢形ではなかつたが、元々は瓢形墳であつたらうと思はれる。^⑩

以上の邑南古墳群以外の明瞭な例に、慶州の東約五軒明活山中腹にある一瓢形土墳がある。これは大正の初葉、關

野貞博士等の學術的發掘を経たもので夫婦塚と呼び、内に二葬あつた。一は地山を約四尺五寸掘りさけて縦十八尺横十二尺の豎壙を作り内に木槨を安置し、諸種の副葬品を藏め、更に川石を覆ひ粘土を塗り其の上を土で封じたものであり、他は割石を以て築いた横壙式石室であつて長方形の竝室の長軸の方向に面して羨道を開き、竝室には棺臺を設け木棺を安じ棺の内外に副葬品を納めたものである。副葬品によつて、夫妻のものとの推測を加へ夫婦塚と呼んでゐる。前者は前節言及した邑南古墳群の構造と全く軌を一にしてをり、出土品も亦同時代のものたるべきを證明する。

更に一墳壙下に三葬以上の例を擧げよう。明治四十三年關野貞博士等が高靈主山東南山腹で池山洞古墳群を調査された際に、一封土内に豎壙式石槨三個を有するものを發見、又今西龍博士は善山郡洛山洞古墳群中の第五十六號墳に三個の長方形石槨のあつた事を報告してをられる。大正七年濱田、梅原兩博士が發掘調査された星州星山洞第二號墳は少くも三個の長方形石槨を包藏してゐた。圓塚の中央に主石室があり、同じ封土内に別に二個の小石室があつて、附屬第一石室は主石室の東壁外部の積石の上に築成せられ、主室と同時に構成されたもの、如くである。三室は長軸が平行し並んでゐた。

昭和九年朝鮮古蹟研究會專業として齋藤忠氏が調査された慶州皇吾里第百九號墳は圓塚で、内に四個の槨を作り、三葬であつた。其の第三槨と第四槨は主副の二槨で一葬分であり、本封土の中心を占めてゐた。第一槨と第二槨とは第三槨の上位にあつて、これよりも遅れて營造された事が明らかであつた。第三、第二、第一各槨が夫々獨立した槨で齋藤氏は副葬品により、第三槨は武人、第一槨は少年、第二槨は女性のものゝ推定され、相互に密接な身分的關係

を認めてゐる。^⑩前掲諸墳同様家族墓的意圖を以て構成された墳壘である事が認められる。

朝鮮古蹟研究會が昭和七、八年度に互つて調査した皇吾里第十六號墳は一封土内に八葬と云ふ稀有の多葬墳であつて、合計十二の積石式木槨と、特殊な瓦被覆の葬跡一個が見出された。本古墳は東西約三十五米、南北約三十米の稍角張つた楕圓形で東半と西半とが隆起してゐた。其の西半の隆起の下にあつた槨は、單獨で一堅壙内に設けられ、他の槨にまさる整つた構築と立派な遺物とを持つてゐた。而して本槨被覆の積石の更に外周には、石垣狀の護石が圓く繞つてゐたが、東と北とに於て他の諸槨室に附隨する同様の護石の圓周上に乗りあがつてをり、本槨が本古墳最後の埋葬であつた事が判断出來た。次に本槨の北に接して一葬あり、一堅壙内に主副兩槨を設け、東西に長い主槨の北邊中央に、方形の副槨をつきたして凸形の輪郭を形作る特殊の構造であつた。以上の二葬が本墳の西半を占めてゐた。次に東半では、北の一堅壙内に略々東西に長軸を置いて平行に並ぶ主副二槨の一葬あり、中央の一堅壙内には東西の方向に主副兩槨を連ねた一葬を見、南には一連の堅壙内に五個の槨室が略東西の方向に連続して三葬に分たれてゐた、而してこの北、中、南の三群は元來一環宛護石を外周に繞らしたものであるが、近接して墓を造り足すに當り、前の護石を取除いてゐる爲、全き形をとゞめず、たゞ西側にのみ繼起連続の原狀を存してゐた。又以上の護石の諸圓に外接するが如く、即ち本墳壙の外周を劃して、總括的な護石を繞らさんとした形跡あるも、古き槨室の手前に到つて中止してをり、又北邊はすべて後世の侵耕により缺失してゐる。たゞ南邊と東邊に於て其の一部を見る事が出來、それにより本墳の壙輪郭を元來も楕圓形であつたと推定する。而して發掘前の原狀が東西に高い瓢形双峰墳の趣を存

してゐた事から、本古墳群中に存する若干の瓢形墳のうちにも、本墳の如き複雑な内容のものが無いとは云へないと思ふのである。元來二圓合體で二葬的性質の瓢形墳中に斯の如き多葬の例のあると云ふ事實は特記に價しよう。

又昭和八年に朝鮮古蹟研究会が調査した慶州皇吾里第五十四號墳は、一際高い隆起を中心に、低い隆起が相寄つて東西約九十米、南北約六十米の小高い一區劃を形作り、外周は周圍の平地より數米高くなつてゐた。中央部を發掘して、主墓を中心に東、西、南、北に各三箇宛の墓があり、夫々の護石の圓を相接し、相交えて主墳の護石の周圍を取巻いてゐる状態を明らかにした。是等が家族墓的意圖を以て集められた事は充分察せられ臺地狀の一區劃内に多數の葬室を包藏する點から云つて、亦多柳式高塚の一種に外ならぬと思ふ。

次に加羅の疆域外ではあるが、同じ南鮮地方の西隅、全羅南道羅州郡潘南面附近に限り分布せる特殊な陶質甕棺主體の高塚古墳群中に多葬の例がある。主體たる甕棺は無論個人墓的性質のものであり、それが一封土内に多數包藏されてゐるのであるから、上來の多葬例と同じ意味を持つわけである。而も其の時代は副葬品により略々同じ頃に比定されてゐるので附載することにする。大正六年と昭和十三年に總督府古蹟調査員が發掘した。今顯著な多葬例を抄録すると次の如くである。新村里第九號墳は底徑百十尺、高十七尺八寸の方臺形墳壘で、十一個の甕棺が墳頂下八尺迄の間に二段になつて埋められ、約三十五尺四方の區劃に互つてゐた。新村里第六號墳は六個、大安里第八號墳は九個同第九號墳は四個、又徳山里第三號墳は三個であつた。墳表下淺き所に主體を埋めた状態や、出土品中特殊な遺物に上代日本の色彩の濃厚なものありて、谷井濟一氏もその報告書中に「恐らく倭人のものなるべし」と云はれてゐるが、

三國時代南鮮に共通の出土品も尠くないので、甕棺自体に甚だしき特異性ありと雖も、亦以て當時新羅及び加羅諸國に流行してゐた一墳多槨式葬法との間に關聯ありと考へることが許されよう。何れにせよ、三國時代の南鮮地方には個人墓的構造を主體とした一墳多槨乃至多葬式の風習が、廣く普及してゐたのである。

四

以上のうち最初に擧げた主副二槨一葬のものは、主槨内の副葬品のみにても、普通の單室と同程度の分量あるに加へ、副葬品充滿の副槨を設けたのであるから、厚葬の一樣相と云ふことが出来る。但し其の副葬品のうち數量の多いのは土器であつて、副槨に三百個を入れた例もあつた。然し副葬品の多寡が墳墓の上級下級に比例するとは限らない。慶州邑南古墳群に就て見るに、豪華を以て著聞な金冠塚、瑞鳳塚、金鈴塚等には副槨の設けなく、貴金屬製服飾品、珠玉に乏しい貧弱な墳墓が却つて屢々副槨を伴つてゐる。謂はゞ質よりも量によつた厚葬のあらはれである。そして副槨を伴ふものが、必ず一封土内に多葬の形をとる。これは慶州邑南古墳群に關する限りの所見ではあるが、數量による厚葬と多葬とが、同時的に行はれた事を示してゐる。

多葬例中最も普通に見られるのは二葬である。長方形槨室が一室一葬の個人墓であり、一墳一室が原則であるので二葬の場合、二圓墳合體の雙峰形墳の形をとるのは、自然である。慶州附近に特に瓢形墳が多いが、その發達は個人墓的な長方形槨室を營み乍ら家族墓的な意圖を滿たさうとした所にあると思ふ。而してこれは單に瓢形墳の成因を説

明するだけでなく、圓塚に二葬の場合を始め多葬高塚古墳一般の成立に就ても同じ見解が可能である。

即ち主體の槨室が個人墓であつた爲に、三國時代南鮮の高塚古墳には多槨多葬式の構成が發達した。一室單葬を限度とする狭い槨室を以て、家族墓的な埋葬觀念を具體化するには、必然的に一封土内に槨室を集めて設ける事になりう。家族墓的な埋葬は、ずつと古い文化階程に於て、地球上の諸所に行はれた證據があり、人類本然の埋葬觀念の一面のあらはれとも云へよう。同じ南鮮地方では金石併用時代の支石墓に多槨式構成の好例がある。數年前京城帝國大學の藤田亮策教授が大邱府内の支石墓群を發掘調査され、一個の巨大な塊石を蓋石とし、之を中心にして、數個の豎壙式長方形石室が整然と集まつてゐる状態を明らかにされた^⑩。支石墓の下部構造と三國時代新羅及び加羅諸國の高塚の内部構造とが類似の趣を有する事は、既に梅原博士等が指摘された通りである。而して兩者の間には前後の連絡を考へ得るが、其の系統觀が妥當ならば多槨式構成も亦傳承されたと解して差支へないであらう。要するに三國時代新羅及び加羅諸國の高塚の特徴は、外觀は高く封土を盛り上げる外來の墓制を攝收し乍ら、内容の主體の構造に舊來の一室單葬の長方形槨室を墨守した點に存するのであつて、多槨式構成もこゝに由來してゐる。此の特徴は一般墓制の沿革と當時の半島の形勢を省察する時、一層明確になると思ふ。即ち單一の個人墓に高大な墳壟を築くのは甚しき厚葬であり、常にいつかは革められてゐる。長方形個人墓から、横口式石室の家族墓に移るのは高塚古墳發達の定則的な順序である。而も鼎立的關係にあつた高句麗、百濟では最初から一室多葬的な横口式石室を以て其の墳墓の主體としてゐた。當時の南鮮地方がこの風潮から全く孤立し得ないのは當然で、明らかに三國時代と認むべき横口式石室墳

が僅少乍ら知られてゐる。斯様な情勢下にあつても、依然として一室單葬限度の長方形榔室を造りつけ、これに高い封土を盛りあげてゐたのであるから、その根強い傳統ふりと、保守的な習俗とを察する事が出来よう。

以上によつて三國時代新羅及び加羅諸國に多榔式高塚が割合に多い理由が諒解されたと思ふ。その發生は必しも外來の一室多葬の横口式石室墳の影響によるのではないが、其の盛行がこれと無關係であつたとは言ひ得ない。やがて一統時代になると、新羅の墓制は全く横口式石室を主體とした一室多葬の家族墓が造られるに至つたのであるから、三國時代末期には外來の影響が特に強かつたと想像される。されば、斯種高塚中何れが古く何れが新しと指示する事は、現在の知見では至難と云ふ外ないのであるが、其の營造が、時代の降ると共に盛んになつたと考へる事は差支ないと思ふ。而して多榔式高塚が最も顯著に發達普及してゐる慶州邑南古墳群に就ては、亦別の事情が伏在してゐたと考ふべきである。それは同古墳群の分布區域が新羅の王都の中心に近く、其の都市計劃たる條里制施行に支障となり、一單葬毎に大封土を盛り上げられては、同王都の發展を阻害することになるので、自然墓地に制限が加はり、四周の山丘部に墳墓を築く様になつたと思はれる。「太宗武烈大王之碑」の立つ武烈王陵が西岳は仙桃山麓に位置してゐるのも、この間の事情を忖度せしむるに充分であり、墳墓營造地變遷の年代觀に一の據所を與へてゐる。即ち慶州邑南古墳群の地域は、墓地として飽和状態に達し、新たに墳壟を興すことが出来難くなつた時期が到來したであらう。そうなれば血族的繋りの濃厚な者同士が、一封土下に相寄つて葬られ、又墳壟を重複させて一區劃内に集るのは當然である。單に家族墓的觀念との關聯だけでなく、斯様な事情の伏在も考慮に入れて、始めて、最後に擧げた様な極端

に多葬の墳墓の成因が充分理解出来ると思ふ。

註

① 上代日本の高塚古墳中、二個以上の長方形柳室を有する例として、上總君津郡飯野村内裏塚、山城乙訓郡寺戸大塚、和泉大仙陵、讚岐高松岩清尾山猫塚等が知られてゐるが、数は少く地域的には分散してゐる。又上代日本或ひは高句麗等に横口式石室二箇乃至數個を一封土内に設けたる例あるも、特徴ある代表的風習と云ふには足りない。

② 野守健氏 朝鮮總督府、大正十二年度古蹟調査報告第一冊。

③ 同 右

④ 齋藤忠氏 朝鮮古蹟研究会、昭和十三年度古蹟調査報告。

⑤ 野守健氏 朝鮮總督府、大正十二年度古蹟調査報告第一冊。

⑥ 今西龍氏 朝鮮總督府、大正六年度古蹟調査報告。

⑦ 拙 稿 朝鮮總督府、昭和六年度古蹟調査報告第一冊。

⑧ 小泉顯夫氏 「慶州瑞鳳塚の發掘」史前學雜誌三十八卷一號、尙南墳は其の後調査された由、近く報告されるであらう。

⑨ 齋藤忠氏 朝鮮古蹟研究会昭和十一年度古蹟調査報告。

⑩ 同 氏 朝鮮總督府、昭和九年度古蹟調査報告第一冊。

⑪ 同 氏 朝鮮古蹟圖譜三及同解説。

⑫ 同 前

⑬ 今西龍氏 朝鮮總督府、大正六年度古蹟調査報告。

⑭ 濱田耕作氏、海原末治氏 朝鮮總督府、大正七年度古蹟調査報告第一冊。

南鮮に於ける多柳式高塚古墳に就て

- ⑮ 齋藤忠氏 朝鮮總督府、昭和九年度古蹟調査報告第一冊。
拙稿 朝鮮總督府、昭和八年度古蹟調査略報告。
⑯ 拙稿 朝鮮古蹟研究会、昭和十三年度古蹟調査報告。
⑰ 谷井濟一氏 朝鮮總督府、大正六年度古蹟調査報告。
⑱ 藤田亮策氏 朝鮮古蹟研究会、昭和十三年度古蹟調査報告。
⑳ 梅原末治氏は朝鮮總督府大正十三年度古蹟調査報告第一冊、慶州金鈴塚發掘塚發掘調査報告の結論に慶州邑南古墳群の中核の積石と南鮮の支石墓の下部構造との間に先後の系統ありとの示唆に富む高説を述べてをられる。私は慶州の高塚の積石式木柳と加羅諸國の高塚の厚い石積壁の石柳とは本質的には同じ構造と考へる。
㉑ 梁山夫婦塚(朝鮮總督府、古蹟調査特別報告第五冊)等がその代表的な例である。